



なごや「聖歌」だより 9月号'08

すでに真の光を観

(我等)すでに真の光を観、天の聖神を受け、
正しき信を得て、分れざる聖三者を拜む、
彼我等を救い給えばなり、

神父の高声「神や、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ」に続いて歌いますが、領聖が終わった安心感からか、人が動くせいか、雑になりがちなポイントです。

歌詞のことばを振り返ってみましょう。

「真の光」とはハリストスその人です。私たちはこの聖体機密のなかで、神の子ハリストスの血と体を受けました。聖神の恩寵を受けました。

聖体礼儀は神の特別の配慮です。今その救いを頂いたからこそ、今神を讃美して歌うことができるようになったのです。その喜びを歌います。

主や、願くは

我が口は讃美に満てられて、我等爾の光栄を歌わん、
爾我等に神聖にして不死なる生命を施す爾の聖なる機密を領くるを許せばなり、祈る我等を爾の成聖に護り、終日爾の義を習わしめ給え、

<口語直訳>

(主よ、我々の口はあなたへの讃美に満たされて、あなたの光栄を歌うことができますように。

なぜなら、あなたは私たちを、あなたの聖なる、神の、不死の、生命を創り出す機密にふさわしいとしてくださったからです。

あなたの「聖」のうちに私たちをとどめ、一日中あなたの義を学ばせてください。)



私たちはみな罪人です。自分の力で「正しく」なれる人はいません。そんな「全くふさわしくない」私たちなのに、主はこの宴席に招き寄せ、生命の源であるご自身の体を与えて下さいました。なんと嬉しいことでしょう。

今、聖体礼儀を終わって、神の国である教会を出て、この世の現実に帰っていくけれど、四六時中あなたを思い、あなたのうちにあり、あなたの望まれるように暮らし、「天に行われるように地にも行われるよう」という熱い願いが歌われています。

「聖歌を歌う」ときは、その祈りのことば、讃美のことばに共感し、自分の気持ちとして歌うことが求められています。私たちの心からの感謝、私たち自身の本気のお願いを神は喜ばれます。

口先だけで歌うことはできません。

伝統聖歌研究会

ズナメニイ聖歌に親しむ

第4回 9月20日(土) 14:00~17:00

講師:イグナティイ代稔

講義内容のまとめはインターネットで見られます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturg>

9月の指揮当番

7日 マリア松島

28日 エレナ 広石

21日 ピーメン松島

聖歌練習

♪名古屋: 毎主日の聖体礼儀後に、その日気づいたこと、「聖体礼儀」の練習を中心に行います。

○今月は代式後の練習はお休み。

半田教会の集会所成聖のお祝いに参加します。

♪半田: 9月10日(水)11:45分頃から。

聖体礼儀を中心に練習します。ユニゾン(単音)できれいにそろえる練習をします。ユニゾンでそろうようになったら、3度のハーモニーもつけてゆきます。

奉神礼の伝統シリーズ4

奉神礼と聖書

聖詠に親しむ

1聖詠（詩編）1節

（第1カフィズマ第1段）

悪人の謀に行かざる人は
福なり

主日前晩禱で「悪人の謀・・・」が歌われます。祈禱書には第1カフィズマ（1-8聖詠）第1段（1-3聖詠）を歌うとあります。カフィズマとは聖詠に収録されている聖詠150編を20区分したものです。その第1区分をさらに三分割した最初セクションの三つの聖詠を歌うという指示です。街の教会では通常全文ではなく、いくつかの句を取り出して歌にしています。修道院などでは全文を歌うこともあります。

悪人の謀に行かざる人は福なり(1:1)

主は義人の道を知る。悪人の途は滅びん(1:6)。

畏れて主に勤めよ、戦きて其の前に喜べよ(2:11)。

およそ彼を恃む者は福なり(2:12)。

主よ、起きよ、(3:8)

救いは主による、爾の降福は爾の民にあり(3:9)

この歌はギリシア語やヘブライ語の原文では「真福九端」と同じく、「福なり」ということばから始まっています。直訳すると「なんて祝福されているんだ！悪人の集まりに行かない人は」です。旧約聖書の箴言「神に逆らう者の道を歩くな。悪事をはたらく者の道を進むな(4:14)」や、エレミヤの預言書の「わたしは笑いさざめく人のつどいにすわることなく(15:17)」と対応するメッセージです。聖書における「悪」とはたんなる犯罪、人道的に悪いことをすることではなく、神から離れること、神をあざけるような生き方をすることを言います。

逆に「義人」とは神に従う人、神の律法を守り、神の前に正しい人のことです。わたしたちキリスト教徒にとって「神の律法」とはイエス・ハリストスその人ですから、ハリストスに従い、ハリストスの教えた愛の誠めを守ることが義人の道を行くこととなります。

教会の一週間は土曜日の晩の祈りから始まります。修道院のきまりに従えば、聖詠は土曜日の晩課から始まって、続く早課（日本ではカフィズマ省略）、毎日の早課、晩課のなかにすべてが配分されて一週間で全編が読まれます。

その最初にこの歌が選ばれて、「畏れて主に仕えよ」「戦いて喜べ」「主を頼むものはさいわいだ」と、これから始まる一週間で主との交わりのうちに過ごすようにと呼びかけられます。

祈りは主との交わりです。3世紀4世紀、砂漠の修道士たちは明けても暮れても聖詠を唱えました。彼らは聖詠を唱えて、神に祈り、神と交わっていました。

歌では省略されていますが、第1聖詠第3節では義人を「水辺に植えられた木」にたとえています。同様の表現は第91聖詠にもあり「神に従う人はなつめやしのように茂りレバノンの杉のようにそびえます。主の家に植えられわたしたちの神の庭に茂ります。」

木を植えても、すぐに実はありません。水をやり世話をする必要があります。同様に祈りを始めたからといってすぐに効き目があるものではありませんが、祈りの習慣を身につけ、絶え間なく主の誠めに思いをよせることは、いつか実を結びます(パトリック・リードン神父)。

逆にたましいの木は世話を怠ると、いつの間にかしおれ、やがて枯れてしまいます。

アトスの長老パイーシイ師は「祈りは我々と神とのコミュニケーションだ。祈りを怠ると、たちまち悪魔がチャンスとばかりやってきて、我々に悪い思いを吹き込む」と語っています。

洗礼によって植えられた木は、たえず祈りの水をやり、命の糧であるご聖体を受け続けてゆくことで、大きく育ち、たわわに実をつけ、主の喜ばれるものとなるでしょう。

その心を主の法に置き、昼夜この法を思念する人はさいわいなり。彼は水辺に植えたる木、ときに及びてその実を結び、その葉萎まざるもののごとくならん(1:3)。



参考資料:『聖詠経』、口語訳聖書『詩編』、Christ in the salms Patrick Henry Readon, Orthodox Study Bible, 正基礎講座テキスト『奉神礼』(トマス・ホブコ神父)。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料